ほくでんの

＜2020年7月27日掲載＞

北海道大好き！～アイヌ語ゆかりの北海道の地名（第１１回）

当社は、７月１２日に白老町にオープンしたアイヌ文化復興等に関するナショナルセンター「民族共生象徴空間（愛称：ウポポイ）」の「官民応援ネットワーク」に参画しています。

先住民族が使っていたアイヌ語を起源とした地名が多く残る我らのふるさと北海道。北海道で使う電気を生み出している発電所所在地の地名などについて、その由来をご紹介していきます。どうぞお楽しみに。

第１１回目は、釧路市音別町の発電所です。

音別（オンベツ）

音別発電所

道東の太平洋沿岸の町音別は、2005年に市町村合併で釧路市音別町となりました。西は浦幌町、東は白糠町と接しており、北海道では珍しい釧路市の飛び地となっています。町の形がミロの「ビーナス」の胴体部分に似ていることから「北のビーナス」として町おこしが進められています。

この音別に、当社の道東地方唯一の火力発電所であるガスタービン火力の音別発電所（１、２号機　合計出力148,000kW）があります。

ガスタービンは軽油を燃やした燃焼ガスでタービンを回して発電する方式で、メリットは小型でも高い出力が得られることで、そのため省スペースで設置できます。また、発電するための起動時間が短く、ピーク時や緊急時に機動性に富んだ発電ができるというメリットもあります。

発電は、札幌の当社本店から遠隔制御による指令で行っています。

さて、「音別」は市街地を流れる音別川に由来します。音別川の由来については説が複数あり、ひとつは、オ・ム・ペッ（o-mu-pet　川尻が・塞がる・川）で、海がしけると、砂で川口が塞がれることからこう呼ばれたという説です。もうひとつは、オン・ペッ（on-pet　腐・川）に由来するとする説です。ただし、「腐る」といっても、ここでは、オヒョウというニレ科の木の皮から繊維を採る際にその内皮を温泉などに浸して「ねとねと」にする（内皮を剥がしやすくなる）ことをオンカ（on・ka）といい、この川でもオヒョウの皮を浸していたのでこう呼ばれたのだということのようです。

（出典：山田秀三「北海道の地名」）